

文藝文庫

武田信玄
風の巻
新田次郎



文藝春秋

甲州金はどのようにして
手に入ったか

諏訪生まれの人 新田次郎の著書より抜粋記事

武田晴信は、藤原が嫡の地蔵殿に立って、遣い書を眺めていた。
（諏訪は既に手中におさめた。佐久と小県はほぼ武田の勢力下にある。板垣信方の軍は上野郡を
席巻しつつある。父信虎が古府中を去ってから二年の間に、武田はこのような進出をしたのだ）

二十三歳の晴信の盛徳であり、駿河へ進出した父に対する感傷でもあった。
（だが、前途は遠い。信濃には、村上義清と小笠原長時の大勢力がある。この勢力を遠放しな
いかぎり、信濃を併せ得たことにはならない。そして信濃の次には――）

晴信の頭の中には駿河の今川義元の頭が浮んだ。甲信のつぎが駿河、駿河の次は三河と東海進
をおし上っていた新田次郎は京都である。

（武田は源氏の末である。將軍の名を尊くによさわしい家筋なのだ）

晴信の夢は春の雲が湧き上るように、かぎりなく膨張していき、突然、なにかにつまずいたよ
うに大きくゆれて消える。戦さには人と金が要る。人はいるが、金はない。父の時代から戦乱に
つく戦乱で、困窮が蔓延している。だからといって、敵を止ばして、敵の財産を奪い取るような
野盗の真似をしていたら、とても天下を平定することはできない。

晴信は駿河の今川義元を思った。彼は梅ヶ島金山、富士金山を開発して、だいぶ儲け合が
いらしい。朝廷に物を献上したり、京都から人をまわくことができるのも金があるからである。
（わが郷土甲州はどうなのだ）

砂金は出るには出るが、その量は知れたものである。そこで考えると、前途が暗くなる。
侍臣が、板垣信方の表訪を告げた。

「信方が、伊弉から帰って来たのか」
晴信はよくないことではなければと思いつつ、広間に引きかえすと、そこに板垣信方と今井兵
部がいた。

「お今井兵部か、しばらくだったな」
晴信は、今井兵部にまず声をかけた。今井兵部は父信虎の盛徳をつかして他領へ逃げた、
奉行衆の一人だった。

「あれから二年たちます。二年の間にお勤様は……」
あれからと今井兵部がいったのは、父信虎を駿河に遠放したときのことだ。がそのあとを兵部
は云えずに涙ぐんだ。日に焼けて色が黒く、二年前よりはずつとやせて、白髪も増えていた。

「そもそも元気で結構だな。ところでなにかいい土産を持ち帰ったのか」
晴信は二年前に、もと奉行衆たちを前にして云ったことを思い出した。

（たとえ父信虎が怒かったにしろ、なんの手柄もないのに、婚約をかなえてやるわけにはいかな
い。武田に仕えたいなら土産を持ってくるがいい）

たしか、そういっただけは罪へ出陣したときだった。

「今井兵部殿は、たいへんな苦勞をなされました。そしてまたとないお土産を持って帰られまし
たぞ」

信方が口添えをした。

「土産とは……」
という晴信に

「呼ぶがいい」
信方は今井兵部をよりかえっていった。今井兵部は一礼して下がると、すぐ三人の男をつれて
来た。

「土産はこれなる三名の金山師にございます。それぞれすぐれたる腕前を持っております。故
この三人を充分にお使いなされて、甲州の金山を開発なさいませうよ」

今井兵部は二年間の辛苦をそのひとことにくめて云った。

「ひとりひとり頭を上げて、名乗るがいい。ついでに、なにを得意とするかいつて見るがいい」
晴信は一番右側に坐っている年輩格の男に向っていった。

「板垣（前重吉）、新田（次郎）と申します。駿河の源氏、信濃の源氏、東海源氏すべて源氏に
来た。」

聞することをいたします。」

百川教右衛門は言葉少なく答えた。

次の男は丹波赤十郎と名乗った。

「金銀で石をたいて精細の山々をめぐり鉱山を発見するのが捕者の仕事でございませう」

色が黒く、眼のぎょろりと大きい、人相のよくない男だった。

「精細の山々をめぐったと申したが、精細の金銀山の主なるものをいって見るがよい」

「精細はきつね眼をしていった」

「さらば、石見國大森嶺山、但馬國生野嶺山、佐渡金山、越後國上田嶺山、越中國河原、松倉、島谷、吉野、下田の精細金山、岩代國黒金山、駿河國麻ヶ島、富士金山、伊豆國……」

「もうよい」

「精細は丹波赤十郎の言葉を聞いて」

「だがまだ甲州の金山は歩いたことがないだろう」

「いえ、既に甲州の金山も歩いておりました」

丹波赤十郎はけろりとした顔でいった。

「誰の許しを得て余の領内の山を歩いたのだ」

「誰の許しを得ておられますか。そもそも山師は、遠く平安朝のころより、どこの山なりと自由に入ってもいいことになっておりました」

「この答えに精細はひどく驚いたようだった」

「勝手に探して勝手に掘るといふのか」

「いえ、山師は金銀を発見するのが仕事でございませう。精細の山をめぐり歩いて、金銀の鉱山を発見すると、これを朝廷に報告し、朝廷はその採掘を地方の国主に命じました。そもそも、金銀はすべて、日本國のものにて、個人のものではございませぬ」

「そもそも」ということをばを流発する丹波赤十郎の話を聞いておると精細はいささか愉快になつた。

「甲州に金の出る山はあるのか」

「黒川山、芳山、黒岩山、御座石山、金山嶺……このほかにもまだございませぬ」

精細の愉快になりかけた心が、赤十郎の答えによって、またひきしまつて来た。この丹波赤十郎のいっていることはほんとうだろうか。

「そのうちでもっとも金の出る山は」

「黒川金山でございませう。この周辺に砂金が出ることは以前から知られております。いまはほとんど砂金はありませんが、銀(金銀石のこと)はございませぬ。新田(良貴な金銀)の産(銀)は無数にございませぬ。また、日本においでなれば、佐渡の金山に続々金山でございませう」

丹波赤十郎は腰すする様子もなくたたらと述べ立てた。

「だが、石の中にまじった金をいって取り出すのだ」

「すると、第三の男が顔を上げた。山師らしからぬ、青白い顔をした男で、大森宗右衛門と小さな声で名乗った。

「この者は、もともとは大森流の能役者でございませぬが、よとした縁で、金山に興味を持ち、金の採掘法について、新しい方法を發明いたしました」

今井兵衛が口添えをした。

「その方法は」

「精細にいわれると、大森宗右衛門は、よとこから紙に包んだ石を出して、前に置いた。その精細は、指先の手を離して精細の手に渡した。

「その石が、いわゆる磁石申すものでございませぬ。白い石の中に青みを含んで見えているのが金でございます。金は砂金のような形をしていないものもあれば、そのような形で、石の中にございませぬものもございませぬ。この金を取るには、まず石を磨き、磨り分け、粉にし、ふるいにかけ、粉に集めて、石と石でなぐものをすり分け、これを篩き、篩の網の中に入れておきます」

「金と銀を分離するのさ」

「たゞうでございませぬ。金銀と金銀のつきやすい性質を利用して、一度は金と銀を一掃りにしておき、その次の段階では、灰に鉛を混ぜておき、金だけをあとに残します。これを灰吹法と申します」

「なるほど、それが考えられたのか」

「南からこれと同じような方法をいろいろ工夫した人はおられますが、この方法を大がかりに使ったのはまだ聞いたことにはございませぬ」

「おおがかりにやたら、多量の金が取れるというのか」

「それは銀の量によりませぬ」

「精細は今度は長距離の百川教右衛門に向つていった。

「黒川金山を調査したか」

「百川教右衛門は今井兵衛の方をちょっとうかがつてから

「おおよそはいりました」

「金の量はどのくらいある」

「さう、五十万両と推察いたしました」

「五十万両と聞いてうなづいたのは長距離の方だった。聴つてから信方は、そこにいる山師たちのいうことが少々心配になつたらしく、今井兵衛の方を見て

「黒川山へのくらくら入つていたのか」

と聞いた。

「三つさばかりかけて、調査いたしました」

「その結果五十万両という数字がでたのか、もしその数字に誤りがなければ、武田家にとつて、これ以上のことはない」

「信方は、金のことで興奮した顔を精細の方に向けた。

「しかし信方、その金はまだ取つてはならないのだ。取つてなければ、ないことと同じではないか」

「精細は落ちつき返つていった。

「金山発掘となれば、それ相応な人を集めねばならない。取り敢えず、どのくらいの人が必要かな」

「信方は今井兵衛に聞いた。

「石工、鑛子、大工、吹工(炭焼工)等千人くらいを入れませうと、年間一百万両の金を出すことは、さうむずかしいとは思いません」

「精細の顔が一瞬ひきしまつた。怒りを発する前の顔だった。でたらめをいうなど怒鳴りたい心を抑制した顔だった。精細は深くひといきつて、前のおりのおだやかな顔になる

「兵衛、それは夢のような土壌を持つてまいりました。その夢の土壌が、夢でなかつたと、余を喜ばせてくれるのはいつごろになるかな」

「いませうかかれば、三つさあとは……」

「よしやつて見るがいい。だが、その金を取り出す方法を信方に知られないようにやるのだ。石工、大工はもとより、金山にたずさわるものは金銀一カ所に集めて、金山衆として管理するがいい。そのかわり信方の交通を遮断しろ、それから……」

「といいかけて精細は言葉を切った。千人の人を使って、年一百万両の金が出なかつたら、切腹を命ずると云おうとしたが止めた。精細は旧臣今井兵衛の白いものが濡れた顔を見るとそれが云えなかつた。精細はあとを信方にまかせて腰を立たした。多量の金が領内から出るといふことはまだ信じられなかつた。金が出れば、甲斐は名実ともに強くなるのである。夢のような話だった。にわかには信じたい話だったが気がいい話だった。

「精細は使者を呼んで、馬を牽いで来るように命じた。精細は、この夢の夢を馬に乗せて走つて見たかつたのである。十里も走つたら、春の夢は覚めるかも知れない。覚めないにしても、あの三人の金山師の使い方に聞かして、もっといい考えが浮かぶだろう。」

湖衣姫の行列は甲斐の陣に入っても、あたたかく迎えられる。諏訪では毎に酒を出したという噂が伝わり、甲斐でも負けずに、酒を出して一行にふるまった。

三日目の夜、湖衣姫の行列が古府中に入るといので、行列を迎えるためつが一里余も続いた。迎えにいきまつと、迎えられるたいまつが交差して、みだれて、赤く燃れた。

晴信は藤原が崎の丘の上から、遠く湖衣姫の輿入れのたいまつが火の近づくのを感じていた。彼は十四歳のとき上杉朝興の娘の於清津を迎えた。そのときの婚儀には灯はなかった。

於清津に従って来たのは三名の侍女と二十人の侍だった。

三隻氏を迎えたときは、供の数は少なかった。はるばる京都からやって来たというのに、さっぱり京都らしくない供廻りだったことだけをはっきり覚えていた。

おごごは祝言はなかったが、おごごの初夜の思い出は晴信の身体に生きていた。そして藤原三夫との祝言は家々にことよせて行われたのである。

「火というものは美しいものだ」

晴信はそばに居る駒井高白斎にいった。

「さよう、美しいものでございます。このたくましいかがやきのように、武田家の運は開けていくでしょう」

武人というよりもむしろ、学者といったほうがよさわしい、駒井高白斎の端々な顔に、久しぶりに浮んで見える、春のような、のどかな色を晴信は見のがさなかった。

高白斎の顔の隅には、いつもさびしいものがあつた。それは戦いに対する不安であり、治世に對する苦慮であり、隣國に對する心配だった。高白斎は、それをつとめて表面には出さなかった。めったなことで、感情を表面に出さない駒井高白斎が、心から湖衣姫との祝言を喜んでいく

れるのが晴信には嬉しかった。

「よいときには、よいことがつとつとつきます。まだまだ、よいことがつとつくとしよう」

高白斎が妙なことをいった。

「よいことがつとつくとしよう」

晴信は高白斎の暗示がなんであるか、すぐには分らなかつた。伊那攻略が一段落したということだろうか。そうでもないかそうである。里美が懐妊したということも聞いてはいない。

「よいときには、よいことの知らせが参りました」

高白斎は半ば微笑を浮かべながら、うしろをふりかえつた。そこに今井兵部が、三名の金山衆を従えて、ひかえていた。

「祝言に来てくれたのだな」

晴信はそういいたが、すぐ今井兵部の前に置いてある白紙を敷いた三方の上に盛り上げてある菓子を見て、おやっといううな顔をした。祝儀に菓子を持って来て、いっこうにさしつかえはないが、その菓子を三方に盛りこんで、領主の前に置くのは、なんともへんだった。

「お館様、お受取り下さいますように」

口添えをする高白斎の微笑が消えて、ひどく緊張した顔になったので、晴信は、その菓子がただの菓子ではないと思つた。

(菓子でなければならぬ。もしや)

その気持が晴信の眼の中で燃え出すと、高白斎は、燭台をその近くに引き寄せた。それは菓子の形をしていて、菓子はなかつた。ひとつちにはほらばつともいほどの大きさの丸い黄金の菓子は、かき立てられたあかりの下で燦然と輝いていた。

「黒川金山で取れました武田の金でございます」

今井兵部は、それだけをよやくのことだ。それまでに、どれだけの苦勞があつたかは、兵部の数せにけた煙のあたりによく見えていた。

晴信の心の中にその金の重さがしみた。

(武田の金でございます)

「いっただ今井兵部のことばは、彼の顔のなかで、雷鳴のようになりびびいた。

今井兵部、丹波赤松十郎、百川敏右衛門、大藏守左衛門の四名の者どももやめたことば、城を固く守り取ったほどの手柄に當る。これからも、いよいよ、その手柄の数を多くしてくれ」

晴信はもつと、おかげさに彼等を讃めてやりたかつたが、すぐに言葉が出なかつた。そばに居る高白斎の方に助けを求めると、高白斎は晴信の顔を眺めて、すぐ下におとした。

高白斎は、一番上に置いている、餅の陣羽織を履の高さまで掲げて晴信にわたしながら、小声で今井兵部殿へといいた。

餅の陣羽織の背に、金糸で武田家が織り出されていた。

四つとも、細い陣羽織だったが、金糸の武田家が入っているのは、今井兵部の陣羽織だけだった。

四人は感激がことばに出せずに平伏したままだった。

「金山衆の支配役として格好なものかどうか着て見るがいい」

晴信は、そういいながら、駒井高白斎のこまかい心づかいに感謝した。いい家臣を持つて幸いだと思つた。

「これで武田は万々歳でございます」

高白斎がいった。

湖衣姫の行列は藤原が崎に止まっていた。長持帯が凍てついた夜の空気をふるわせている。

晴信はよと今宵の湖衣姫との初夜のむすびを想像した。あの湖衣姫が、どんな顔で、晴信を迎え入れるかを考えると、胸が痛つた。